社会の病状 "青少年問題"

町ぐるみ皆の手で

本當のことを飾らずに言おう

問題の所在つかんで治療

あらゆる場につながる"青少年問題"

青少年問題ということが、いろ〳〵の意味をこめて、さまざまな場所や席上で、もろ〳〵の人々の間で語り合われています。つながりの多い人にとっては、話題となる機会があまりに多過ぎて、その応接に苦しむまでに盛んにとりあげられているといわれます。

警察でも、民生委員の会議でも、保護司の社会福祉協議会の席上でも、学校でも、PTAでも、青年会や婦人会、青少年団体の集会や教育委員会の懇談としても、公民館活動の中でも、とりあげられ、"悪の経済のしくみ"や"ボス"や"マスコミュニケーション等にもつながる問題として頭解されねばならない所までは進んでいます。

34年度の青少年犯罪は九十九件

七月四日、市公会堂で開催された、社会教育委員、公民館運営審議会、図書館協議会三者合同会議で、市長、議長、総務文教委員長、教育委員等も交え、この問題の総合的解決について話し合いをし、市域を通じあらゆる活動領域とつながる組織活動の必要が結論づけられました。

昭和初期年中の新潟警察署で取り扱かった青少年犯罪と呼ばれる件数は九十九件で、その内訳は

一四才未満　三二
一四～一六才　一五
一六～一八才　二七
一八～二〇才　二五

この殺人が銃の類とは、私に知られない間にことを起し、家の手にかぎってとりかえるくらいくっている親を驚かせ、その原因を知らせていますが、ここでは、もとへ戻すはおろかなかえの影響を他に及ぼさないように行なうべきであるこの問題の解決方法の一つとして、青少年の"自己確認"の為の"みんなが医者の気持ちで"医者は腹痛の患者を診断するのは、たとえ一週間も入浴しない病だけの身体であっても患者の身体にさわり、必要があればそのえ大小便をさえ見つめるのであります。患者は医者の言うがまゝに昨日の己れの食事の内容や量を告げ、その必要られるまゝに裸にになべ口を出し、アーと叫ばねばならないでしょう。

青少年問題が社会の病状として、社会の病のとされれば、社会を緩改革されるべきであり、五、に医者であり患者である立場に立ねばならないことは、申しあげるまでもありません。

何とかかんかサッと気のない者はいないといいこまれるようにしてはいけない。

ばかりまずかッ気のなかなかの解決は出ない